

本科 2 期 9 月度

解答

Z会東大進学教室

東大国語



## 【問題】（演習）

出典：作者不詳 「増鏡」 下第十四「春の別れ」／オリジナル問題

## 現代語訳

（嘉曆元年＝一二二六）陰曆三月の初めの頃から、皇太子（邦良親王）さまは病氣でおいであそばして、日を追うごとに重くおなりあそばす。種々の（加持祈禱の）御修法をはじめとして、御祈願だ、何だかんだと、（皇室の御祖神である）伊勢神宮にも御使者をお送り申し上げあそばすけれども、（それらの祈禱や祈願の）甲斐もなくて、三月二十日、（皇太子は）とうとう薨去しておしまいあそばした。東宮御所の中は、火が消えたよう（沈み込んだ）霧雨氣で、だれもがうろたえている。（皇太子の）御乳母である対の君という女性は、夜も昼も（皇太子の）おそばを離れずお仕え申し上げることが習慣となっていたので、たいそう悲しい心の動搖は、本当に鎮めることができ難い様子である。御臨終と見受けられていらっしゃる（皇太子の）お顔に近寄つて、「そうやつて、（命の）残り少ない（このばあやの）身をお見捨てあそばしたままでは、（ちゃんとあの世まで）お行き着きになることはおできあそばしませんでしょう。もう一度、（せめて）お声だけでもお聞かせくださいとお連れあそばしてくださいませ」と、声も控えずひどく泣いていらっしゃる御様子は、何ともいたましいことだ。総じて、御所の中（の人々）が泣き叫び悲しむあります、（何かにたとえて）言うような術すべもない。（皇太子の御祖母にあたる）永嘉門院さまは（御自分のお腹をお痛めになった）親王もおいであそばさないので、常日頃から、この皇太子さまを（夫の）お亡くなりになつた後宇多院が（皇太子の面倒を見ててくれるよう）お申しつけあそばしてあつたこともあつて、今でも同じ御所に（暮らして）いらっしゃる。（また）皇太子妃に（おかげで）も、（もともと皇太子妃は）故後宇多院の姫君である内親王を永嘉門院さまのおそばでお大切に御養育申し上げなさつた（その姫）を、そのまま、（皇太子妃として）めあわせてさしあげておいでになつた（方な）ので、（お二人はお互に）一人といない相手という様子で愛情をおかわしになつて（仲睦まじく）過ごしておいであそばす（のだが、そのような方）などは、ひどく悲しみに沈みこんでいらっしゃる。（し

かし）そのまま（悲嘆にくれてばかり）いるわけにもいかないので、（皇太子御存命のころの）普段と同じお出かけの形で、（皇太子の父君にあたる）先の（後二条）帝が（永眠して）おいであそばした北白川の陵へ（皇太子の御遺体を）お納め申し上げあそばしたのであつた。

## 解答

(一) ア＝皇太子は亡くなつておしまいになつた

ウ＝きっと私を連れておいでになつてくださいませ

カ＝そのまま悲しみに沈んでばかりもいられないでの

(二) そんなふうに、余命わずかな私をお見捨てになつては、皇太子さまはあの世に行き着くことはおできになりますまい

余命わずかな私をそんなふうにお見捨てになつては、皇太子さまはあの世に行き着くことはおできになりますまい（別解例）

(三) 故後宇多院の言いつけで皇太子は永嘉門院の手許で育つたので、皇太子の成人後も一人は同じ御所にいるということ。

(四) 故後宇多院の娘で永嘉門院が育てた姫を、同じ御所で育つた皇太子とそのまま結婚させたということ。

## 【問題】(自習)

出典：栗津則雄『日本洋画22人の闘い』／ 東京大学 91年

### 文章略解

油絵の持つ強固で精密な再現力はヨーロッパ独特の感覚に根ざしたものであるが、それが普遍的なものと錯覚されるほどの魅惑力を持っていた。その一方、日本の感性は風景と浸透しあうことを旨とし、油絵の強い物質感と立体的空間性に違和を覚えていた。かくして、わが国の洋画家たちの工夫が生まれた。それは、油絵を、それがはらむすべての危険性を含めて全的に受け入れ、その際の画家の内面の苦しみを積極的に創作の契機とする、というものであった。

### 解答

- (一) 元来は西洋独特的感覚に根ざす油絵は、その強固な再現力ゆえに、絵画の一般的な姿であると思い込まれてきたこと。
- (二) 強い物質感と立体的空间性とを持つ油絵の風景表現と、風景との相互浸透を旨とする日本の感性とが、なじまないこと。
- (三) 油絵の手法と日本の感性との本質を突き合わせず折衷すること。
- (四) 日本人の洋画家たちは、油絵を受容することに伴う内面の葛藤を創作の原動力に高めなければならないということ。

- (五)   
a = 我慢      b = 凡庸      c = 代物      d = 妥協

(一) 設問の要求は、まずは傍線部分に言うところの「ヨーロッパという特殊を普遍と思い誤りかねない」という表現の具体化、統いては「魅惑力」の内容の具体化……という二点と推察される。

前者に関して言えば、直前の記述が手がかりになる。「一見普遍的一般的なものに見えるそのような特質も、実はヨーロッパ独特の物質感覚、空間感覚に根ざし、そこから生まれたものである」(4~6行目)とあるように、「油絵」の依拠する感覺は「ヨーロッパ独特」のものであるということだ。それが「普遍的一般的なものに見える」という誤解を招来する……という筋での指摘がほしい。このように考えてくると、後者の課題も明確になつてくる。こうした「ヨーロッパ独特」のものを「絵画一般」であるかのように誤解させる「魅惑力」の正体とは何か。これについては、「魅惑力」について説明された部分を問題文中に求めていけばよい。冒頭の一文「油絵の持つ強固で精密な再現力は……」(1行目)以下に、この「魅惑力」についての説明がある。要は「強固」な物質的再現力の、その「強固さ」ゆえに人々を引きつけた(誤解させた)、ということだ。この点の指摘があればOK。

(二) 設問の要求は、傍線部分に言う「あるよそよそしさ」の内容を具体化させることにある。

この「あるよそよそしさ」とは、直前にある「そういうこと」と対して感じられるものである。この「そういうこと」とは、前文の「油絵具によって表現した風景」の「強い物質感と立体的な空間性」(28~29行目)を指している。まずはこの点を明確にしておく必要があろう。

では、その「そういうこと」に対して感じる「あるよそよそしさ」とは何か。問題文の文脈を遡ると、この「感じる」の主語は「彼ら」(29行目)。「わが国の画家たち」(27行目)である。そこを押さえた上で、「わが国の画家たち」が「油絵」の「強い物質感と立体的な空間性」に対して抱いている感情について述べられた部分を問題文中に探していく。第一段落の終わりに、日本人の画家について「すぐれた画家であれば……油絵」という表現に反抗する何かを、鋭い痛みのように感じていたはず」(9~11行目)とあり、その「反抗する何か」についての具体的な叙述が次段落にあることに注目できれば、解答を導くのは容易であろう。「風景」を例にとって筆者(栗津)は「われわれの風景観には、風景とわれわれとが互いに浸透しあっているところがある」(12~13行目)と述べている。こうした「風景観」と、前掲の「油絵具によって表現した風景」の「強い物質感と立体的な空間性」とが齟齬をきたす旨の指摘があれば、出題の要求に応えたものとなろう。

(三) 設問の要求は、①「このような」の指示内容の明確化・②それがいかなる意味で「及び腰」なのかという性質の指摘、の二点として捉えられよう。

まずは①。前段落末尾の「両者ともにその危険な牙を抜かれ、中途半端な妥協によつて、束の間の和合を楽しむだけ」(36～37行目)とあるところの「両者」とは「油絵」という手法と日本的感性」(32行目)を指す。この「両者」が中途半端な妥協をする……というのが解答の筋となろう。

では②。それがいかなる意味で「及び腰」なのか。問題文中にある「危険な牙を抜かれ……」という比喩的な表現の意味するところを明解な表現に置き換えていくことがここでの作業課題であろう。これについての直接的な叙述は問題文中に求めにくいかが、傍線部分直前の「油絵」という手法と、われわれに固有な意識や感性の動きとを真に結びつけるという厄介な仕事」(38行目)と述べている部分や、直後に「油絵を、それがはらむすべての危険をふくめて、全体的に受け入れる必要がある」(39～40行目)と述べている部分などから推せば、筆者(栗津)がこの両者を本質的に相容れないものとして捉え(二)の解説も併せて参照)、その両者の本質を突き詰める必要性を認識していることが読みとれよう。そうした突き詰める作業をしないことが「及び腰の姿勢」なのである。このニュアンスをくみ取った指摘がほしい。

以上二点を踏まえた解答ならば、出題の要求に応えたものとなろう。

(四)

傍線部分に指示語が含まれている場合には、その指示内容を明確化させることが必須の条件となる。この設問においてはまず①「この亀裂や解体」の内容を明示することが第一の作業課題である。その上で②「進んでおのれの表現の動機にまで鍛えあげる必要がある」という表現の意味するところを具体化する、ということになろう。

まずは①。直前に「そのことがわれわれのなかに生み出さざままな亀裂や解体」(40行目)とある。この「そのこと」とはさらに前の「油絵を、それがはらむすべての危険をふくめて、全体的に受け入れる」(39～40行目)ことを指す。ここでいう「われわれ」の範囲は、「油絵」を受け入れる人のことであるから、「日本人の洋画家」と解するのが妥当であろう。「亀裂や解体」という表現は比喩的だが、解答欄の大きさを考えれば「亀裂」「解体」双方についての指摘をするよりは、「内面の葛藤」という程度にまとめてしまった方が得策であろう。以上をまとめれば、「日本人の洋画家たちが油絵を全的に受容することに伴う内面の葛藤」となるうか。では②。それを「進んでおのれの表現の動機にまで鍛えあげる」とはどういうことか。ここまで検討してきたこととの表現とを

照らし合わせれば、①のような「内面の葛藤」を、作品を創る際の原動力として用いるべきだ……とする筆者（栗津）の主張が見えてこよう。この旨の指摘があればよい。

以上①②を踏まえた解答ならば、出題の要求を満たしたものになろう。

## 【問題】（演習）

出典：『神仙伝』／オリジナル問題

## 書き下し文

茅君は幽州の人なり。道を斎に学ぶこと二十年。道成りて家に帰る。父母之を見て大いに怒りて曰はく、「汝不孝なり。親を供養せずして、妖妄を尋ね求め、四方に流走す」と。之を笞たんと欲す。茅君長跪して謝して曰はく、「某命を上天に受け、応に道を得べきに當る。事両ながらは遂げず、違ひて供養に遠ざかる。日々多く益無しと雖も、今乃ち能く家門をして平安にし、父母をして寿考ならしめん。其の道已に成る。鞭辱すべからず。小故に非ざるを恐る」。父怒りて已まず杖を操りて之に向ひ、適に杖を擧げんと欲するに、杖即ち搘け、数十段と成る。皆飛びて弓の矢を激するがごとく、壁に中れば壁穿ち、柱に中れば柱陥つ。父乃ち止む。茅君曰はく、「向に言ふ所は、正に此くのごとく邂逅中に人を傷つくるを慮りしのみ」。父曰はく、「汝道を得たりと言ふは、能く死人を起すや否や」と。茅君曰はく、「死人の罪重く悪積むは生を得べからず、横傷短折なるは即ち起すべきのみ」。父之を為さしむるに驗有り。

## 現代語訳

茅君は幽州の人であった。道術を斎（の地）で二十年間学んだ。道術（の会得）が成就して、（故郷の我が）家に帰った。（茅君の）父母はこの茅君を見て大いに怒って言つた、「お前は親不孝者だ。親を養わずに、（道術などという）わけのわからぬ怪しいものを探し求め、あちらこちら渡り歩きおつて」と。（父親は息子の）茅君を笞打とうとした。茅君は背筋をのばしてひざまずいて（父母に）謝り、こう言つた、「私は使命を天から受け、道術を会得せねばならない身となつたのです。（道術の修行と親孝行との）事は二つとも同時には為し遂げられません、（だから両親に対する子としての義務に）背いて親孝行から遠ざかっていたのです。（私は親孝行の面では）長い間ずっと何の役にも立ちませんでしたが、これからはやっと家族を平穏にし、父上母上を長生きさせてさしあげができるで

しよう。かの道術の道はすでに会得しました。（私を）笞打ちで恥ずかしめないでください。（もしそうしたら）些細な事故では（済ま）ないことが心配なのです」と。（これを聞いても）父は怒りが治まらず、杖をとつてこの茅君に向かい、今にも杖を振り上げようとした（その）とたんに、杖はあつという間に碎けて、数十片（の破片）となってしまった。（その破片は）すべて、弓が激しく矢を飛ばすかのように飛び（散り）、壁にあたれば壁は穴があき、柱にあたれば柱がへこんだ。（このような異様な事態を目の当たりにして）父はやつと（息子を笞打つのを）やめた。茅君は言つた、「先ほど（此細な事故では済まないと）申し上げたことは、實にこのように（私が父上や母上と）対面している間に（私と対しておられる父上や母上と）いうまさにその）人を傷つけてしまいかねないのを、ただ憂慮したのです」と。父は言つた、「お前は道術を会得したと言つたが、死人を生き返らせる事もできるのか、それともできないのか」と。茅君は言つた、「死者の罪が重く悪事を重ねてきた（者な）のだったら、（もう一度）生を得（て蘇らせ）ることはできません。（しかし）謂われのない怪我などで早死にした（者な）のだったら、すぐさま蘇らせる事ができます」と。父が（実際に）この（死者を蘇させること）を（茅君に）やらせてみると、（果たして）利き目があつ（て死者は蘇つ）た。

### 解答

- (一) 道術大成と親孝行とは同時にはできないということ。
- (二) 父親が茅君を傷つけようとすれば、天が茅君を守ろうとする力が働き、大事故になるおそれがあるということ。
- (三) 先ほど私が言つたのは、今しがたのようなことが起きて、相対しているうちに父上や母上を傷つけかねないのをただ憂慮したのです。
- (四) 本人に罪のない傷害で早死にした者という意味。

## 【問題】(自習)

出典：村上陽一郎『社会から読む科学史』／オリジナル問題

### 文章略解

一九世紀に自然哲学から科学が独立して以降、科学者と呼ばれる人々の集団<sup>①</sup>「科学者共同体」が生成された。この「科学者共同体」に関して、その「共同体」としての概念を問うことと同様に、一般社会との間のチャネルの態様を問うこともまた、重要な課題である。科学社会学とは、このように社会に浸透してきた科学のあり方を問う自己言及的な学問であるが、そこには「科学」が持つ、没主体的に世界を語るという性質との齟齬がある。

### 解答

- (一) 科学理論の生成や推移は、社会制度としての科学者共同体のあり方の推移と不可分のものであるから。
- (二) 科学が社会に深く浸透することによって、科学社会学の方法論や問題関心、研究者の意識が規定されてくるということ。
- (三) 科学における個々の事象からは離れ、それらの性質を抽象化する方向で科学のあり方を論じようとすること。
- (四) 主体の立場を捨象するという科学の特徴と、科学者の方針を自己言及的に問う科学社会学とが矛盾をきたすこと。

- (五) **a** = 違背      **b** = 精選      **c** = 画然      **d** = 永劫

(一) 傍線部分に言う「全く同じ」とは直前の「科学理論がどのように生まれてきたか、あるいはどうしてある理論体系から別の理論体系に移行したのか、というような種類の問い合わせ」と、「これらの問い合わせ」(12～13行目)との共通性を指している。この指示内容は、「共同体」についての疑問・問題を「科学者共同体」についてあてはめることである(11行目)。つまり、①「科学理論」の生成・推移の過程と、「科学者共同体」のあり方をめぐる問い合わせとが、科学史のなかで同等の意義を持つ、ということだ。まずはこの両者の指摘がほしい。

では、この両者が科学史のなかで同等の意義を持つとは具体的にはどういうことなのか。これについては、「科学者共同体」と「科学」それ自体との関係を説明すればいい。問題文冒頭の段落にある、「科学は、しだいに社会のなかに制度としての姿を現わしていく」(2～3行目)ということを軸として、②「社会制度としての『科学者共同体』」という指摘ができるべきだ。要するに、科学理論は理論それ自体として成立するのではなく、それを作る人のあり方の問題と切り離せないということだ。この旨の理解が反映されれば解答としてはOK。

(二) 傍線部分に含まれる「それ」の指示内容は、前段落に述べられているところの「科学は……社会全体のなかに浸透し、社会全体を特徴づけるなものか」(35～36行目)である。まずはこの①「科学」が「社会全体」に浸透している旨の指摘がほしい。

その上で、これがいかなる意味で「科学社会学という学問そのものにも、自己回帰的に響いてくる」のかを説明していけばいいわけだ。この作業に際しては、直後の「つまり」以下で要約・換言された記述の意味するところを手がかりにしていけばいい。②「科学社会学」が、いかなる方法論といかなる問題意識をもつてことに当たるか・③「その研究に携わる主体の心はいかなる『見えざる制度』を用意して現象の解明に当たるか」という二つのことがらのエッセンスを抽出したい。要するに②「科学社会学の方法論・問題意識」という学問の側の事情と、③「研究者の意識」の双方が、①によつて規定されてくる……ということだ。この指摘がなされていればOK。

このことは、より詳しく言うならば、30行目以降で述べられているように、「理科教育」や「コンピュータ」などの形で科学が市井人の日常生活に浸透して、科学研究者以外の人の意識にまで入り込んだ結果として、科学研究者(ここでは科学社会学の研究者)が、「市井の人々の意識に入り込んだ科学」を意識して研究しなければならなくなつたという事態を意味する。

(三) 「メタ」という語の意味するところ（「現実の事象それ自体からは一步引いた抽象化をすること」）がわからなくても、直後の表現から推測できるのではあるまいか。つまり、「科学史、科学哲学、そして科学社会学」の三者が「自己言及的な性格」を帯びる、ということだ（46行目）。これらの「自己言及的な性格」とは、「科学のあり方」を歴史・哲学・社会の面から問う性格のものであることを意味している。ということは、他の科学の分野であるところのもの（たとえば物理学・生物学・天文学など）のように、具体的な事物のあり方を直接に解明する学問ではないということになる。

したがって、解答としては、①「現実の具体的な事物との結びつきがない」・②「科学のあり方を検討する学問」という二点が指摘できていればいいことになる。

(四) 傍線部分に言う「その科学の特徴」とは、前行の「あたかも言及する主体の立場は全く存在しないかのように、世界について語ることのできる」ことを指す。解答にあたってはまずこの①「科学」の性質における「主体を捨象する」こと、の指摘がほしい。

その上で、それが「科学社会学そのものにも入り込んでくる」ということの具体的な内容を、問題文の記述に即して指摘すればいいわけだ。これについては、(一)～(三)で検討したところが押さえられていれば容易であろう。(一)(二)で検討してきたように、筆者は「科学研究のあり方」を、そこにかかる主体＝研究者のあり方と不可分のものとして捉えている。それが(三)で言う「科学社会学」の「自己言及性」につながっているわけだ。こうした②「科学社会学」の「主体性」「自己言及性」が指摘され、それが①と矛盾をきたす……という筋でのべてていけばいい。

●  
メ  
モ  
●

## 【添削課題】

出典：長谷川宏『新しいヘーゲル』／オリジナル問題

## 文章略解

我々の生きる社会では、人と人が調和することをよしとするが、ヘーゲルの生きた西洋近代社会は個と共同体が激しく衝突し、矛盾することをいとわない。こうした生活実感の相違に気づかなければヘーゲルの弁証法を理解することはできない。近代とは、個と共同体がみごとに調和していた古代ギリシアから歴史的発展を遂げて生じた一つの段階であり、個と共同体の対立も腐敗や堕落といった現象ではなく、本質的な変化であるといえる。

## 解答

- (一) 日本の社会では調和に価値を見出しが、ヘーゲルは個と共同体が対立する社会観を抱いており、その対立をこそ重視していたから。
- (二) 真の個人主義者は、個の自由と自立を近代社会を構成するうえでの前提とするから、他者の自由と自立も最大限に尊重するということ。
- (三) 個人が理想を追求しつつ生きることがすなわち共同体精神の体現であり、個人と共同体の存在が矛盾なく調和している社会。
- (四) 個人が自立し共同体と鋭く対立するようになるのは、近代社会が生成発展していく過程で生じた、当然の結果だということ。

(五) ヘーゲルの生きた西洋近代社会を個と共同体がみごとに調和していた古代ギリシャ以来の歴史の流れの中に位置づけて、個と共同体の対立は、腐敗や堕落といった断罪すべき現象ではなく、歴史の発展とともに生じた本質的変化であると捉え直すことができるから。

(六) a // 德目 b // 援用 c // 歪曲 d // 包摂 e // 思索

〔119  
字〕

## 【問題】(自習)

出典：『栄花物語』／オリジナル問題

### 現代語訳

(皇后定子さまに憑いた) 御物の怪 (を移された寄りましの人) が、たいそうやかましくわめいているうちに、長保二年(陰暦)十二月十五日の夜になつた。帝におかれても(皇后さまの御様子を)お聞きつけあそばしたので、どんな様子かどんな様子かというお見舞いの使者がしきりに訪れる。そうしているうちに御子がお生まれになつた。女子でいらっしゃるのが残念だが、ともあれ御安産でいらっしゃるのが何よりであると思って、さしあたり後産のこと(が心配だということ)となつた。(周りに控える女房たちが)額をついては騒がしく祈り、(宮の御兄弟の帥殿伊周さまや中納言隆家さまは)あれこれと御誦経(を寺社に依頼するためのお布施)をお取り出しあそば(して、各所に送るための使者をお出しあそば)すが、御薬湯をさし上げても(宮はそれを)お召し上がりになる御様子でもないので、居合わせた者は皆うろたえ、途方に暮れるばかりであつたところ、ずいぶん長い時間になつてしまふので、やはりよいよ気がかりなことである。「灯火を近くに持つて来い」と(言つ)て、帥殿が(宮の)お顔を拝見なさると、全く生きてはいらっしゃらない御様子である。あまりのことに驚いて(脈を)お探り申し上げなさると、そのまますっかり冷たくなつておいであそばしたのだった。

ああ、大変なことになつたと慌てふためいている間にも、僧たちはうろうろして、それでも御誦経を絶え間なく続け、(部屋の中でも外でも(女房たちも一緒になつて)いつそう額を(床に)すりつけて大声で祈るのだが、何のかいもなく(皇后さまは)亡くなつておしまいあそばしたので、帥殿は(皇后さまの亡骸を)お抱き申し上げあそばして、声も惜しまずお泣きになる。そのように(みなが悲しんで)いるのも当然のことであるけれど、そう(悲しいことを)嘆いてばかりはいらっしゃるだろうか(そんなわけにもいかない)ということで、生まれたばかりの宮を抱いていたのをほかにお移し申し上げておいて、(亡骸は)横たえてお寝かせ申し上げた。「ここ数日、何かほんとうに心細いとお思いでいらっしゃった御様子も、どんなものかとお見上げ申していたのだけれど、ほんとうにこんな(皇后さまがお亡くなりになると)まではお思い申し上げなかつた。寿命の長いということはなんともつらいことだつたのだなあ」と(言つ)て、「何としてもお供して(あの世に)参つてしまいたい」(など)とばかり、中納言(隆家)さまも帥殿

(伊周) さまたお泣きになる。姫宮〔=脩子内親王〕、若宮〔=敦康親王〕などを、皆ほかの場所にお移し申し上げるにつけでも、忌まわしく情けないことである。この（皇后さまの御兄弟でいらっしゃる）殿方の（配流の）折りに、（この皇后さまの）御所内の人々の涙は尽き果てたのであつたけれど、（このたびの皇后さまの崩御に際しての皆の悲しみようを見ると、涙というものは）いつまでも尽きないものであつたのだなあと見受けられた。

### 解答

(一) ア=皇后はその薬湯をお召し上がりになる

ウ=抱いていたのをほかにお移し申し上げて

オ=何とか皇后にお供して私たちもあの世へ参りたい

(二) 皇后の死が悲しいのは当然のことであるけれど、いつまでも嘆き悲しんでばかりもいられないということ。

(三) ほんとうにこのように皇后がお亡くなりになるとまではお思い申し上げなかつた

### 解説

(一) 傍線部訳の問題。傍線部口語訳の場合、一般的な解法は次の二点に絞られる。まず、傍線部を品詞分解すること。これによつて単語一つ一つの姿が浮かび上がり、逐語訳のための土台ができる。次に、前後の文脈の中でどういう位置を占めるか、構造的に捉えることである。これによつて、逐語訳だけでは把握できない文脈上の言葉の意味が見えてくるのである。具体的に見てみよう。  
ア「きこしめし入るる」は、品詞分解すると「きこしめし（動詞「聞こし召す」の連用形）+入るる（動詞「入る」の連体形）」となる。もちろん、複合動詞として一語と考えることもできるが、細部を検証し、語そのものを確認するのが品詞分解の目的だからこう分けておく。「聞こし召す」は、通常「お聞きになる」「お聞き入れになる」などと訳されることが多いが、「食ふ・飲む」など飲食の動作の尊敬語としても用いられることがある。その点を忘れないで、文脈を捉えた読み方をすると、「御湯などまるらするに」（御薬湯を差し上げても）「きこしめし入るるやうにもあらねば」、「皆人あわてまどふ」（居合わせた者は皆うろたえる）とい

う構造が見えてくるだろう。単語の意味への思い込みや先人觀を排除して文脈を把握することが正しい訳を作ることである。尊敬語の訳し方としては「お～になる」が基本形だが、「食ふ・飲む」に関しては「召し上がる」という置換型の尊敬語が存在するので、こちらを優先する。(たしかこは食事ではなく薬なので、「お飲みになる」ならば許容解とする。また、「聞こし召す」は最高敬語なので《解答》では「お召し上がりになる」としたが、「召し上がる」だけでも十分に尊敬語として通用する)さらに、傍線部には主語が省略されているのでこれを補うこと。《客語(＝直接目的語)》については、傍線部直前に「御湯など」と表現されているので必ずしも補う必要はないだろうが、接続助詞を介して別の節になつてている点と、解答欄にゆとりがある点とに鑑みて、念のため補つておくのがよかろう。

ウ「抱きはなちきこえさせて」は、品詞分解すると「抱き(動詞「抱く」の連用形)+はなち(動詞「放つ」の連用形)+きこえさせ(動詞「聞こえさす」の連用形)+て(接続助詞)である。このうち、「はなつ」は「放つ」で、「手放す」「解放する」などといつた比較的連想し易い訳例から「疎んじる」「遠ざける」など単語単独では思いつきにくるものまで多々ある。さらにここでは「抱きはなつ」と複合動詞となつてている点にも注意して、この語も解釈は文脈にゆだねよう。「きこえさす」は「申し上げる」「さし上げる」などと訳される謙譲語だが、ここは補助動詞。文脈を見てみると、「さるべきなれど、さのみ言ひてやはとて」(悲しいのは当然であるけれど、いつまでも嘆き悲しんではかりもいられないということ)「若宮をば」「抱きはなちきこえさせて」「かき臥せたてまつりつ」(お横たえ申し上げた)となつてている。「さるべきなれど、さのみ言ひてやはとて」に注目すれば、生まれたばかりの若宮を横たえたのではなく、亡くなつた宮を安置するために、若宮を別の場所へ移した様子が浮かんでこよう。さてここで「抱き放つ」だが、これは「抱きて放つ」すなわち「抱いてから放す」と違つて複合動詞になつていることから一つの動作を示しており、「それまで抱いていたものを放す」の意で用いられる表現である。客語は傍線部直前に示されたばかりなのでとくに補う必要はない。

オ「いかで御供に参りなん」は、品詞分解すると、「いかで(副詞)+御供(名詞)+に(格助詞)+参り(動詞「参る」の連用形)+な(助動詞・確述「ぬ」の未然形)+ん(助動詞・意志「ん(む)」の終止形)となる。「いかで」は文末の「ん(む)」と呼応して「何とかして～たい」の意となる。「御供に参る」は「お供をして参上する」といった意味だろうが、どこへなのか、文脈の中を考えると、直後に「中納言殿も帥殿も泣きたまふ」とあるから、宮を恋い慕つてのこととわかり、「あの世へ」の意が浮かんできてわかりやすい口語訳が完成する。「お供する」は従属的な行為なので、その対象としての人物を明示する。なお、《解答》では主語を補つたが、一般に願望表現「～したい」の主体は「～したがる」などと違つて話し手と決まるので、この主語はなくてもよいだ

ろう。ただし補う場合は、傍線部が発言・会話表現であることに鑑みて、固有名詞でなく自称代名詞を用いる必要がある点に注意。

- (二) 傍線部内容説明問題。東大の過去問に、指示語を具体化して現代語訳することや説明することを要求する設問が多いのは周知のことであろう。この場合も、傍線部イには、「さるべき」・「さのみ言ひて」と指示語がある。指示内容は内容の反復を避けるために用いられるのが原則だから、文脈をたどってみると直前に「(帥殿) 声も惜しまず泣きたまふ」とある。「さるべきなり」は、その内容を肯定・認定し、当然のことであるといつたんは断定する表現だから、指示内容は「ひどくお泣きになる」あるいは「ひどく悲しい」をあてることで、成り立ちそうである。次の指示語「さのみ言ひてやは」では、「さ」は「のみ」を従えながら「言ふ」にかかっていて「さ言ふ (ひどく泣く・嘆き悲しむ)」という動作がその内容であることが見えてくる。すると、傍線部の直前の「声も惜しまず泣きたまふ」という動作を受けているのは「さるべき」ではなくむしろ「さのみ言ひて」であることがわかる。文脈の本筋の中に、逆接句として「さるべきなれど」が挿入された構文だったわけである。ならば、むしろ傍線部イの前半「さるべき」の指示内容説明としては心情語である形容詞「悲しい」を用いるのが適切となる。「悲しい」→「ひどく泣く」の流れである。これらのポイントに注意した上で、助動詞「べし《当然》」「なり《断定》」、副助詞「のみ《強意》」、複合係助詞「やは《反語》」を確実に表現に反映させた形で説明形式に整えて解答すれば完成する。

- (三) 傍線部の現代語訳問題。指示内容が明らかになるようにとの条件がついているのは「いかくまでは」を指している。またこの傍線部が会話文内にあることも注意すべき点である。会話文の場合、自然な形に近い訳としては、「いかくまでは」は逐語訳的に「ほんとうにこんなことにおなりあそばすとは」といった訳になるであろうが、指示内容を明らかにという条件だから「皇后さま (＝定子さまなども可) がお亡くなりになる」という具体的表現に変える必要がある。あとは「思ひ (動詞) + きこえさせ (補助動詞《謙譲》) + ざり (助動詞《打消》) + つる (助動詞《完了》)」と品詞分解して、特に敬語に注意して訳出すればよい。



会員番号	
------	--

氏名	
----	--